

2022年6月12日 礼拝説教要旨

詩編講解説教111「救いのいろは」

詩編111：1～10、ローマ3：21～26

詩編第111編は冒頭に括弧して「アルファベットによる詩」とあります。今日は説教題を「救いのいろは」としましたが、要するにこの詩編は「いろは歌」です。これには子どもに覚えさせる教育的な意図があると考えられます。子どもに教えるとなると、それはやはり「いろは」なのです。初歩と申しますか、基本を教えるのです。今日の111編には信仰の基本、いろはがあると申し上げてよいと思います。神さまはわたしたちにどのような救いを行ってくださったのか。そのことが簡潔に記されています。

111編は全体的に出エジプトの出来事を表していると考えられます。イスラエルにとって出エジプトというのは決定的な神さまの救いの出来事でありました。例えば、4節の「驚くべき御業」というのは、イスラエルがエジプトから救い出される時の主の過越の出来事や有名な海を二つに分けた奇跡などを連想することができます。そのような驚くべき御業をもってイスラエルはエジプトから救われました。また同じ4節「恵み深く、憐れみに富み」は金の子牛を作ったイスラエルをそれでもその契約のゆえに赦された憐れみと理解することができます。5節の「主を畏れる人に糧を与え」は荒野で神さまがマナやうずらを与えてイスラエルを養われたこと、6節の「諸国の嗣業を御自分の民にお与えになる」「嗣業」とは相続のことですが、これもイスラエルを約束の地カナンまで導かれたことを示しています。7節「主の命令」はモーセの十戒と理解することができます。そして「主は御自分の民に贖いを送り、契約をとこしえのものと定められた」(9節)「贖い」とは代価を支払って解放すること。イスラエルにしてみれば、エジプトからの解放を意味します。

このように見てまいりますと、神さまがどのようにイスラエルを救われたのか。そして神さまがその契約のゆえにイスラエルを養われ、約束の地まで導かれていくことが簡潔に詠われています。これはイスラエルにとって救いのいろは、基本中の基本なのです。ここにすべての信仰の根拠、土台がある。ですから親はこのことを子どもに伝えることが親としての義務になります。ちなみにこのことは出エジプト記や申命記においても教えられていますのでご参照ください(申命記6：6～、6：20～等)。そしてこの詩編のように神さまの救いを歌うことで信仰は受け継がれていきました。

そして実際に、この信仰の基本が教えられることで、それがイスラエルにとって救いとなり慰めとなりました。この111編が成立したのもバビロニア捕囚後と言われます。厳しい捕囚の生活がありました。しかし捕囚の間も出エジプトの出来事を思い起こし、神さまはその契約のゆえに自分たちは決して見捨てられないことをイスラエルは信じることができました。必ず約束の地に帰ることができる。その希望を捨てませんでした。それゆえに捕囚を解かれ荒廃した国に帰った時にイスラエルの人々が真っ先に行ったことは神殿の再建し神さまを礼拝することでした。神さまは自分たちをひどい目に合わせたと言って神さまを恨むのではない。神さまを礼拝したのです。「ハレルヤ。わたしは心を尽くして主に感謝をささげる。正しい人々の集い、会衆の中で」(1節)それは彼らの中に信仰が受け継がれていたからです。あの出エジプトの時と同じように、再び神さまは自分たちを救ってくださった。国に帰ることができた。それゆえにイスラエルの人々は前を向いて神さまを礼拝し、生活を立て直していきました。

このことはキリスト者、新しい神の民であるわたしたちにも当てはまります。神さまはその憐れみゆえに驚くべき御業を行われました。それがイエス・キリストの救いです。9節に「主は御自分の民に贖いを送り、契約をとこしえのものと定められた」とあります。この「贖いを送り」の「送る」という言葉は新約聖書においては神さまが御子を世に送ることを意味する言葉として使われます。イエス・キリストを世に遣わされて、その尊い代価が支払われてわたしたちは罪から贖われ、解放された。神さまの救いの契約は更新され永遠のものとされました。それゆえわたしたちは約束の地、永遠の神の国に入ることができるのです。ここにすべての基本、救いのいろはがあります。

そしてこの救いの基本、土台があるからこそ、わたしたちはどのようなことが起こっても揺るがずに生きていくことができます。「主を畏れることは知恵の初め。これを行う人はすぐれた思慮を得る」(10節)「主を畏れることは知恵の初め」これは箴言にも出てきますが、これこそ出発点、第一原理なのです。この神さまの御業を覚え、それゆえに神さまを恐れ敬うことが信仰の基本の「キ」です。そしてそのように信仰の基本を持つ者は、「すぐれた思慮を得る」のです。「すぐれた思慮」というのは、英語では good understand あるいは good sense と訳します。良い理解、良いセンス、良識を持って生きる人間です。それは例えば、今の時代のような悪い時代にあっても、自暴自棄にならず、希望を持ち続けることでしょう。

先週は全国連合長老会の会議の開会礼拝がオンラインで行われました。議長の藤掛順一牧師が「コロナ捕囚」という言葉を使われました。多くの牧師たちが今の時代をそのように表現して、捕囚の中にある状態と考えます。でも希望なのは、すでに神の民は出エジプトもバビロニア捕囚も通ってきました。驚くべき御業によって神の民が解放されたこと経験しました。そしてわたしたちもまたイエス・キリストの十字架とよみがえりによって罪から贖われ、御国が約束されています。その救いをわたしたちは経験しているのです。そのことがたとえ困難な時代にあっても希望を持ち、揺らぐことなく落ち着いて生きることを可能にします。その具体的な生き方が次の112編に示されます。